



世界の言語と日本語.....

角田太作 著



大付録

世界の 1 3 0 の言語の語順の表
.....

角田太作著

世界の 言語と 日本語

江苏工业学院图书馆
藏书章

言語類型論から見た日本語

くろしお出版

著者紹介

角田太作（つのだ・たさく）

1946年群馬県生まれ。東京大学文学部卒業。モナシュ大学大学院修士課程卒業（M. A. 取得）、博士課程卒業（Ph. D. 取得）。言語学専攻。主な研究分野はオーストラリア原住民語学と言語類型論。現在、筑波大学文芸言語学系助教授。著書に

The Djaru Language of Kimberley, Western Australia (Canberra : Pacific Linguistics, 1981) がある。

世界の言語と 日本語 ●

1991年4月20日 第1刷発行
1991年9月30日 第2刷発行
1992年10月30日 第3刷発行

著者 角田太作

版元 くろしお出版

〒101 千代田区神田小川町3-24

Tel&FAX 03-3291-3557

表紙 砂川博茂（CREART）

組み 壮光舎

刷り モリモト印刷

製本 大洋社

©Tasaku TSUNODA, 1991, Tokyo

ISBN4-87424-054-2 C3081

無断コピーお断り

はしがき

本書の内容は「言語類型論の観点から見た日本語」と言える。本書の主な目標は以下の二つである：

- (A) 日本語を世界の諸言語と比較して、似ている点、異なる点を見る。換言すれば、日本語を世界の諸言語の中に位置づけて、日本語を新しい、幅広い視野から見る。
- (B) 文法の考え方を学習する。従来、学校などで習った文法にとらわれずに、自由で柔軟な考え方で、文法を、特に日本語文法を、見直す。

本書の各章は、その内容によって、概略、次の四つに分かれる。

(1) 第6章、第7章の内容は私自身の研究の結果である。第6章は Tsunoda (1981b, 1985b) に、第7章は Tsunoda (近刊 a) と角田 (1990d) に、基づいている。

(2) 第2章、第5章、第9章、第10章は、内容の全てが私自身の研究の成果という訳ではないが、従来の研究成果を踏まえ、私自身の研究も入れて書いた拙論に基づいている。第2章は Tsunoda (1988b, 1990a, 1990b) と日本語教育学会 (1991) の第6章 (角田が担当) に、第5章は Tsunoda (近刊 b) に、第9章は角田 (1989b) に、第10章は Tsunoda (1987a, 1987b)、日本語教育学会 (1991) の第6章に基づいている。

(3) 第4章、第8章の内容については、今まで管見を出版したことは殆ど無い。しかし、ここでも、従来の研究成果に加えて、私自身の考察も述べてある。

(4) 第1章、第11章には、私自身の研究の成果といったものは殆ど無い。

本書では、日本では余り馴染みの無い言語、例えば、豪州原住民語、から例を挙げることがある。その目的は、世界の諸言語には日本語

とタイプの異なる言語があること、または、日本では余り馴染みの無い言語でも、日本語と同じ原理が働いていることを示すことである。これらはいずれも、上記の二つの目標を考慮してのことである。

本書を読むのに、言語学の知識は前提としていない。高校で習う英文法と国文法の知識があれば、理解できる内容であると思う。ただし、さあっと読み流して理解できる内容ではない。丁寧に、考えながら読むことが必要である。

本に注が有ると読みにくい。特に注が脚注ではなくて、その章の最後か本の最後などにある場合は一層、読みにくい。これを考慮して、本書では、注は一切、用いない。注に当たるものは、全て括弧の中に書いて、本文に入れた。

例文で、文頭に疑問符(?)の付いている文は、あまり自然な文ではないが許される文、星印(*)の付いている文は許されない文、非文法的な文である。(この様に区別することが困難な場合もあるが。)

本書で用いた略語などは以下の通りである：1 は 1 人称；2 は 2 人称；3 は 3 人称；単は単数；両は両数；複は複数。

最後に、下記の方々（敬称略、五十音順）が本書の原稿の全体または部分を読んで貴重な助言をして下さった：大坪一夫、岡田公夫、金田章宏、小林典子、佐藤琢三、高橋太郎、堤美知子、角田三枝、野田尚史、保阪泰人、松本克己、松本泰丈、皆島博。本書で直接には扱っていないことも含めて、文法の諸分野について、Barry J. Blake、高橋太郎、柴谷方良の諸先生が指導して下さいました。また、本書の出版にあたり、くろしお出版の岡野ゆみ子さんと福西敏宏さんから、様々な面で援助を頂いた。なお本書で報告した研究の一部は筑波大学平成2年度学内プロジェクト研究費の援助を受けた。皆様に心からお礼申し上げます。

筑波

1990 年 9 月

角田太作

目次

はしがき	i
第1章 はじめに	
1.1 言語類型論	1
1.2 諸言語を比較することの意義	1
1.3 日本語を世界の諸言語と比較することの意義	2
第2章 語順	
2.1 はじめに	3
2.2 資料	3
2.3 考察	24
第3章 格	
3.1 はじめに	29
3.2 格の組織	29
3.3 まとめ	37
第4章 名詞句階層	
4.1 はじめに	39
4.2 格組織	41
4.3 日本語の受動文	45
4.4 発話当事者の視点ハイアラキー	47
4.5 日本語の他動詞文の無生物主語	48
4.6 「は」と「が」	51
4.7 ナバホ語の語順	53
4.8 ジャル語の付属代名詞	55
4.9 日本語の形式名詞「こと」など	57
4.10 まとめ	61
第5章 他動性	
5.1 はじめに	63
5.2 伝統的な定義	63
5.3 日本語の他動性の研究	66
5.4 原型	71

5.5	他動性の定義の提案	72
5.5.1	他動性の原型の意味的な側面	72
5.5.2	他動性の原型の形の側面	74
5.6	日本語における他動性	75
5.7	意志性	81
5.8	残された問題	86
5.9	おわりに	87
第6章 二項述語階層		
6.1	はじめに	89
6.1.1	述語	89
6.1.2	項	89
6.1.3	日本語での項の例	90
6.2	二項述語階層	94
6.2.1	意味	96
6.2.2	品詞	98
6.2.3	格	99
6.2.4	ボイス	109
6.2.5	日本語への反映	112
6.2.6	ロシア語への反映	114
6.3	まとめ	116
第7章 所有傾斜		
7.1	所有者敬語	117
7.1.1	はじめに	117
7.1.2	所有傾斜	118
7.1.3	所有者敬語（その1）：いわゆる尊敬語	122
7.1.4	所有者敬語（その2）：いわゆる謙譲語	126
7.1.5	個人差について	130
7.1.6	「正しい」敬語との関連	131
7.2	所有者昇格	132
7.3	豪州原住民語の所有格と同格表現	136
7.4	日本語の所有の動詞	139
7.5	日本語の「名詞+の+名詞」	144

7. 6	英語の疑似過去分詞	146
7. 7	ワルング語とジャル語の所有接尾辞	148
7. 8	身体部分と属性について	149
7. 9	「している」、「ある」、「持つ」と「所有物+の+所有者」	154
7. 9. 1	「している」	155
7. 9. 2	「ある」	157
7. 9. 3	「持つ」	159
7. 9. 4	「所有物+の+所有者」	161
7. 9. 5	まとめ	162
7. 10	まとめ	163

第 8 章 主格、主語、主題、動作者：文法分析の四つのレベル

8. 1	はじめに	165
8. 2	四つのレベル	167
8. 3	混乱の例	169
8. 4	意味役割のレベルと格のレベルの関係	177
8. 5	意味役割のレベルと情報構造のレベルの関係	179
8. 6	格のレベルと情報構造のレベルの関係	180
8. 7	学問での理論的構築物、即ち、学者のでっち上げ	183
8. 8	文法機能のレベル	184
8. 9	英語における文法機能	187
8. 10	文法機能を考える時の注意	200
8. 11	日本語における文法機能	203
8. 12	諸言語における主語	221
8. 13	まとめ	223

第 9 章 日本語は特殊な言語ではない。しかし、英語は特殊な言語だ。

9. 1	はじめに	225
9. 2	語順	227
9. 3	格	233
9. 4	名詞句階層	233
9. 5	他動性	233
9. 6	二項述語階層	234
9. 7	所有傾斜	234

9.8	文法機能と主語	234
9.9	まとめ	235
9.10	誤解の原因	235
第10章	言語教育への提案	
10.1	初めに	239
10.2	母語の影響	240
10.3	テストの結果への反映	242
10.4	諸言語の知識	245
10.5	まとめ	248
第11章	おわりに	251
参考文献		255
大付録	語順の表	265
付録	言語の分類	291
索引	事項と語彙などの索引	299
	言語名の索引	313
	人名の索引	317
図と表	図1 格の組織	30
	図2 動作格型格組織	34
	図3 シルバースティーンの名詞句階層	39
	図4 対格と能格の分布	42
	図5 日本語の能動文と受動文	47
	図6 日本語の二項述語の格枠組み	112
	図7 所有者敬語(その1)	124
	図8 所有者敬語(その2)	128
	図9 所有者傾斜のその他の反映	137
	図10 テストの結果	244
	表1 日本語、英語とタイ語の語順	25
	表2 ワルング語の格組織	44
	表3 飾りの表現	57
	表4 日本語における他動性	80
	表5 二項述語の分類	95
	表6 日本語の所有の表現	163

第1章 はじめに

1.1 言語類型論

言語学の分野の一つに「言語類型論と言語普遍性」と呼ばれる分野がある。この分野は単に「言語類型論」または「言語普遍性」とも呼ばれる。以下では、略して「言語類型論」と呼ぶ。(厳密に言えば、「言語類型論」と「言語普遍性」は別のものである。両者の関係については、Comrie (1981: 30-35) 参照。)

言語類型論は世界の諸言語を比較し、以下のことを研究する：

- (A) 諸言語はどのような点で、どの程度、異なっているか？
- (B) 諸言語にはどのような点で、どの程度、共通性があるか？

世界の諸言語に共通である（と見なされている）法則性は言語普遍性と呼ばれている。

言語類型論の概説書には Comrie (1981), Mallinson and Blake (1981) などがある。言語類型論の概略は、日本語では、柴谷方良・角田太作 (1982), 角田 (1983a, 1988d), 柴谷 (1989) などにある。

1.2 諸言語を比較することの意義

では、世界の諸言語を比較することには、どのような意義があるのだろうか？
先ず、言語普遍性を捜すには、諸言語を比較しなければならない。そうしないと、ある特徴が世界の言語に共通するものであるか、ある言語に固有のものであるか、分らない。

また、諸言語を比較してみると、ただ一つの言語を研究しているだけでは、気が付かない法則性を発見することがある。キーナンとコムリー (Keenan and Comrie 1977) が提案した名詞句階層や、第4章で扱う、シルバースティーンの提案した名詞句階層がその例である。

更に、諸言語と比較することによって、ある言語の特質が浮かび上がって来る。一つの言語を見ているだけでは、ある特徴がその言語に固有のものであるのか、そうではないのか、分らない。第2章で扱う語順がその例である。様々な言語の語順を比較すると、実は、様々な語順の型があることが分かる。

1.3 日本語を世界の諸言語と比較することの意義

1.2で述べたことが日本語の研究についても言える。日本語を世界の諸言語と比較して初めて、日本語と他の言語の類似点、相違点が分かるのである。ただ、日本語を見ているだけでは、この様なことは、分らない。

よく「日本語は特殊な言語である」などと言う人がいる。また、「日本語の特質」、「日本語の本性」といった様な題の本もある。しかし、これらの人達は日本語を世界の諸言語と比べていない。世界の諸言語と比較しなければ、日本語が特殊であるかどうか、分らない。

日本語の特殊性とか特質といったものを語るには、先ず、日本語を世界の諸言語と比較しなければならない。本書では、日本語をなるべく多くの言語と比べるように努める。特に、語順に関しては、世界各地の130の言語と比較する。

日本語のいわゆる特殊性については、第9章で詳しく述べる。結論としては、日本語は世界の諸言語のなかでごく普通の言語である。

日本語の場合とは逆に、英語は世界の言語の中で代表的、標準的な言語であると思っている人がいる。実は、英語はある点では、世界でも希にみる、極めて珍しい言語である。このことも、英語を世界の諸言語と比較して初めて判明した。詳細は第9章で扱う。

第2章 語順

2.1 はじめに

本章では、語順の観点から、日本語を英語、タイ語と19の項目について比較する。(以下、「日」、「英」、「タ」と略すことがある。)項目の選定は語順類型論の先駆者 Greenberg (1963) を参考にして行った。

日本語と英語を選んだ理由は明白であろう。タイ語を選んだ理由は本章の最後に明らかになる。結論を先に述べると、この三つの言語は語順に関して、三つの異なるタイプに属す。日本語とタイ語は語順に関してかなり一貫して逆さまである。英語の語順は一貫性が無い。日本語と同じになったり、タイ語と同じになったりする。

日本語の語順の詳細は Tsunoda (1988b) に、タイ語の語順の詳細は Tsunoda (1990a) にある。タイ語については、出版されている文法書から得た資料に加えて、タイ人のマリー・ケオマノーナムさん (Malee Kaewmanotham) から直接、資料を得た。また、これら三つの言語の語順の比較の概略は日本語教育学会 (1991) の第6章にある。しかし、以下では、上記の研究で述べなかったことも加えてある。尚、語順の類型論の概観は、英語では Comrie (1981), Mallinson and Blake (1981) などに、日本語では角田 (1983a, 1988d), 児玉 (1987), 松本克己 (1987) などにある。

2.2 資料

[1] 主語、目的語と動詞

言語類型論での習慣に従って、主語 (subject) を S, 目的語 (object) を O, 動詞 (verb) を V と略す。[1] では、平叙文でしかも、肯定文であるものだけを見る。疑問文は [13] から [16] で、否定文は [17] で検討する。最初に他動詞文を、次に自動詞文を見る。

他動詞文については、日本語では主に SOV の語順を用いる。英語では主に SVO の語順を、タイ語では SVO だけを、用いる。

(2-1) 日： 太郎が 花子 を 見た。 (SOV)

(2-2) 英： John saw Marry. (SVO)

‘ジョンがメアリを見た。’

(2-3) タ： malii hěn sǒmsāk. (SVO)

マリー 見る／見た ソムサク

‘マリーがソムサクを見る／見た。’

(タイ語の動詞は活用語尾が無い。同じ形が過去も現在も未来も示せる。)

厳密に言えば、日本語では動詞が文末に来ることが、重要な規則である。動詞が文末に来さえすれば、主語と目的語は入れ替わってもよい。

(2-4) 花子 を 太郎 が 見た。 (OSV)

話言葉では、主語や目的語が動詞の後に来ることも頻繁に起こる。そういう意味では、動詞が必ず文末に来なければならないという訳ではない。¹しかし、その場合、文が一旦終って、何かを付け加えたという感じがする。

(2-5) 花子 を 見た, 太郎が。 (OVS)

また、柴谷 (1981 : 52) の指摘するように、動詞が文末に来ないで、文頭などに出る言い方もある。特に、²標語や広告文などによく見られる。

(2-6) 事故を呼ぶ、酒が、疲労が、スピードが。 (柴谷1981 : 52) (OVS)

(2-7) 聞かせて下さい、土地を売る話を。 (柴谷1981 : 52) (VO)

(2-8) 乞う ご期待。 (VO)

英語では、目的語が主語の前に来ることがある。

(2-9) That play, John saw yesterday. (Chafe 1976 : 49) (OSV)

仮の訳：‘その劇は、ジョンが昨日見た。’

Chafe (1976 : 49) によると、この様な文は対照を表すという。「他の劇はともかくとして、その劇について言えば、ジョンが昨日、見た」という様な意味であろう。(対照については、4.6も参照。)

タイ語では、私がケオマノータムさんから調べたところでは、平叙文は SVO のみを用い、他の語順は許されない。(しかし、一般疑問文では OSV が可能である。例は (2-93)。)

次に、自動詞文を見る。日本語では主語と動詞の順番については、上で他動詞文について述べたことが、当てはまる。英語では、自動詞文の語順は普通、SV である。しかし、ある種の条件の下で、主語と動詞の倒置が可能である。(詳細は Penhallurick (1984) など参照。)

(2-10) Bill rushed into the room. (SV)

‘ビルが部屋に駆け込んだ。’

(2-11) Into the room rushed Bill. (VS)

‘上に同じ’

しかし、他動詞文ではこのような倒置は許されない (Penhallurick 1984: 35)。

(2-12) Harry pushed Bill into the room. (SVO)

‘ハリーがビルを部屋に押し込んだ。’

(2-13) *Into the room pushed Harry Bill. (VSO)

タイ語でも、自動詞文は普通、SV である。しかし、磯部 (1988) によると、次の三つの動詞は VS の語順を取る: mii ‘存在する’, kâat ‘起こる’, praakòt ‘判明する’。

(2-14) mii nǎngsǎi bon tǒ. (VS)

ある 本 に テーブル

‘テーブルの上に本があります。’

(2-15) kâat faimâi. (VS)

起こる 火事 ‘火事があった。’

(上で、主語、目的語という用語を用いたが、厳密に言うと、実は、これらに關しては難しい問題がある。主語とは何か、目的語とは何か、については、第8章で詳しく検討する。第7章までは、余り厳密に考えないで、大まかに、次のような意味で用いる。主語：他動詞能動文では、動作者あるいはその類を指す語句。自動詞文では動作者、存在物、状態の持ち主などを表す語句。目的語：他動詞能動文の動作の対象あるいはその類を指す語句。

また、上で、動詞という語を用いたが、厳密には述語と言うべきものである。動詞は名詞、代名詞、副詞、形容詞などとともに、品詞の分類に關することである。一方、主語と目的語は、第8章で見るように、語句の文中での役目による分類に關することである。従って、厳密に言えば、動詞を主語、目的語と并列に扱うことは不適切である。主語、目的語、動詞の語順とは言わないで、主語、目的語、述語の語順と言うべきである。しかし、語順の類型論の研究では SOV, SVO などといった言い方が既に定着している。新しい言い方を用いると混乱を引き起こすおそれがあるので、不本意ながら、述語の代わりに動詞という語を使う。)

[2] 側置詞と名詞

側置詞 (adposition, Comrie 1981 : 85) の代表的なものは前置詞 (preposition) と後置詞 (postposition) である。日本語、英語、タイ語共に、側置詞がある。側置詞は、大まかに言って、日本語では名詞の後に来る、即ち、後置詞であり、英語とタイ語では前に来る、即ち、前置詞である。

(2-16) 日: バンコク に

(2-17) 英: in Bangkok ‘バンコクに’

(2-18) タ: nay krungthêeb

に バンコク ‘バンコクに’

‘日本語は普通、後置詞言語と呼ばれている’ (Tsunoda 1988b など参照)。しかし、安藤節子 (私信) によると、ある特殊な条件の下でだけ使われるのではあるが、前置詞が存在する。例は「至名古屋」と「於名古屋」。この「至」と「於」は、語源的には多分、中国語の影響であろう。しかし、もはや、日本語の一部となっていることは否定できない。語源は動詞であるかも知れない。しかし、この様な用法では、前置詞とみるのが妥当であろう。これらは、書き言葉だけで用いられる。しかも、発音されることが無い。非常に特殊な前置詞である。同じ様な例で、私が見つけたものに下記の例がある。全日空の機内誌「翼の王国」1990年6月号 (No. 252) の全日空の路線図で、空港を表す記号の説明が次の様に書いてある:

(2-19) 空港 (含む無線航法援助施設)

この「含む」も、起源は動詞であるが、もはや、前置詞と見なすのが妥当であろう。(英語の including ‘を含めて’ も、起源は動詞 include ‘含む’ であるが、この用法では、もはや、前置詞である。) この「含む」も、書き言葉だけで用いられて、発音されることは無いであろう。

先日、横浜であった結婚式の案内状に次の様に書いてあった:

(2-20) ホテル、ニューグランドに於て

この「に於て」は前置詞ではなくて、後置詞 (もっと正確に言えば、複合後置詞) である。更に、前置詞の「於」とは違って、発音される。

日本語の場合とは逆に、英語は普通、前置詞言語と呼ばれている。しかし、英語にも少数ながら、後置詞がある。例えば、over ‘の一面に’ は (2-21) では前置詞であるが、(2-22) では後置詞である。

(2-21) all over the world ‘世界中に’

(2-22) all the world over ‘世界中に’

Notwithstanding ‘にも拘らず’ も、前置詞と後置詞の両方の用法がある：

(2-23) notwithstanding the rain ‘雨にもかかわらず’

(2-24) my wishes notwithstanding ‘私の願いにもかかわらず’

(Over, notwithstanding などについて、前置詞であるが名詞の後に置かれることもある、などと書いてある本もある。しかし、この言い方はおかしい。名詞の後に来るのなら、その場合は後置詞である。) Ago ‘…前に’ は、副詞としている辞書もあり、形容詞としている辞書もある。しかし、Lehmann (1978: 174) と安藤節子(私信)の指摘するように、後置詞と見なすべきであろう。

(2-25) ten minutes ago ‘10 分前に’

更に、次の様な例もある：

(2-26) What for ? ‘何の為に?’

(2-27) Where from ? ‘どこから?’

(2-28) Who with ? ‘誰と一緒に?’

これらは、省略文である。例えば、(2-26) は下記の様な文が省略されたと見てよいであろう：

(2-29) What am I living for ? (Chuck Willis)

‘私は何のために生きているのだろうか?’

(この例は Chuck Willis という歌手の歌った歌の題である。歌の題または歌詞から例を採った場合には、その歌手またはグループの名前を括弧内に示す。)

(2-26) から (2-28) の様な言い方はよく、話言葉で聞かれる。これらの例で, for, from, with などは後置詞と見なしてよいであろう (Blansitt 1988: 175)。

(最後に、日本の学校で習う文法の用語について感じたことを述べておきたい。英文法で前置詞と呼ばれているものと国文法で格助詞と呼ばれているのは、共に側置詞である。例は、「学校 へ」と to school ; 「学校 から」と from school。名詞などの前に来るか後に来るかという点で違う。しかし、現在、用いられている教科書では、共に側置詞であるという共通点を全く無視して、全く異なる名称で呼んでいる。これは、得策ではない。英語の前置詞を格助詞と呼ぶか、あるいは、日本語の格助詞を後置詞と呼ぶか、あるいは、他の方法を考えて、用語の統一をはかるべきであろう。そうすれば、生徒にとっても、この面での、

2.2 資料

日本語と英語の似ている点と異なる点が明白になり、日本語の理解にも、英語の学習にも役立つであろう。日本語と英語を比較して、類似点、相違点を捜し出させる様な教育方法を用いると、言語を幅広く見る視野を形成するのに、少しは貢献すると思われる。）

[3] 所有格と名詞

所有格は日本語では後置詞「の」で示され、所有物を示す名詞の前に来る。タイ語では一般に前置詞の *khǒng* で示され、名詞の後に来る。英語には二つの方法がある。一つは、*Saxon genitive* ‘サクソン所有格’ と呼ばれるもので、*'s* を用いる。所有物を示す名詞の前に来る。もう一つは、*Norman genitive* ‘ノルマン所有格’ と呼ばれるもので、*of* を用いる。所有物を示す名詞の後に来る。(Comrie 1981 : 85) 代名詞の所有格も名詞の前に来る。(英語のこの二つの所有格の意味、用法の違いはかなり複雑であるらしい。R. Hawkins (1981) など参照。)

(2—30) 日： 太郎 の 家 私 の 家

(2—31) 英: Tweedledum's house 'トウィードウルダムの家'
the house of Tweedledum 'トに同じ'

(Lehmann 1978a : 177)

my house '私の家'

(2—32) 夕 : bân khǒng malii

家　　の　　マリー　　‘マリーの家’

bân không díchấn

家　　の　　私　　‘私の家’

(ちなみに、代名詞の *dichăn* ‘私’ は女性だけが使う。一方, *phổm* ‘私’ は男性だけが使う。いわば、日本語の「僕」などに当たる。)

[4] 指示詞と名詞

日本語と英語では、指示詞は名詞の前に来るが、タイ語では逆である。

(2—33) 日： この 家

(2-34) 英: this house ‘この家’

(2—35) 夕 : bâan nîi

家　この　‘この家’